

御三卿一橋徳川家の儀礼
- 覺了院様御実録を中心に -

坂本 幸子

儀礼は近世武家社会において、身分や格式を表すための場として重要な役割を果たしてきた。特に、江戸城内で執り行われる行事や儀式では、席次ならびに作法により、当時の身分を厳格に表していた。これを大名や役人が忠実に守ることに、將軍を頂点とした武家社会の秩序が保たれていたといえる。しかし、江戸時代中期になると、御三家のような親藩大名とも違うが「將軍家の身内」という家が誕生する。御三卿である。

御三卿は8代將軍吉宗の2男宗武、4男宗尹、9代將軍家重の2男重好を祖とする、田安・清水・一橋家をさす。江戸城内に邸を与えられ、参勤交代などの軍役負担はなく、幕政にも関与せず、儀式や行事への参加、ご機嫌伺いの登城や將軍からの訪邸、両卿へ訪邸をしながら日常を過ごしているという。実に気楽な身分ではないか。とはいえ、將軍家の身内とあれば、何か重要な役割があるに違いない。そこで、御三卿の主な「仕事」とされていた公儀への参加をみることにより、その役割や位置づけが見えてくるのではないかと考えた。とはいえ、田安・清水両家はまとまった史料は散逸していると思われ、儀礼に特化した研究はおろか、御三卿の研究自体そう多くはない。その一方で、一橋家においては、一橋家創設期から明治期に至るまで「ほぼ漏れなく」「現存」されているため、この史料を活用し本研究の調査を進めることとした。その中で、初代宗尹の記録である「覺了院様御実録」を中心に、文献調査を行った。覺了院様御実録における儀礼である殿中儀礼、成長儀礼を主に抽出をし、その内容とともに考察を加えた。なお、殿中儀礼からは日光社参、八講法会、將軍宣下、朝鮮通信使来朝、阿蘭陀人登城を、成長儀礼からは宗尹の誕生から元服までを抽出した。

覺了院様御実録は宗尹の行実を客観的に記したもので、行事や儀式の詳細や「宗尹の意向をくみ取る」のは難しいとされている。実際に儀礼においては贈答品や来客の詳細はあるものの、儀式の内容そのものを詳しく知ることはできなかった。しかし、それらの記述を基に、関連資料にあたることにより、複眼的視点で史実を復元できたことが本研究の成果である。また、相続などに柔軟に対応する家を作ったことにより、將軍継嗣や折々の政治状況を乗り切るための役割を果たしていたといえる。これまで見てきた儀礼を將軍家や御三家などと比較することにより、その役割や位置づけがより明確になるのではないかと考える。これを今後の展望とし、本研究を終えたい。

(指導教員 綿抜豊昭)